

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：36301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25580072

研究課題名(和文)人間は人工神となりうるか？フロイトとカフカのアントロポロジー

研究課題名(英文)An Anthropological Study of Freud and Kafka

研究代表者

山尾 涼(Yamao, Ryo)

松山大学・法学部・准教授

研究者番号：70639608

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文):近代以降の新しい「人間像」構築へのフロイトとカフカによる影響を、自分自身の身体に内在する「他者性」をキーワードに精神医学的、文学的、病跡学的な見地から総合して探る人間学的考察を行なった。世界には<身体>が先立ち、その認識には心が投影されるというフロイトの説は、カフカの世界認識と重なる。人間の精神と身体を無定形の複合体と捉える彼らの思索の源を探り、フロイトはそれをどのように証明するか、カフカはいかに文学として描出したか、人間が「人工神」となることの不可能性を解く試みだった。期間内に査読付論文1本、著書3冊(うち2冊研究叢書)、学会発表3回(うち1回招待講演)を通じて成果を公表することができた。

研究成果の概要(英文):How did Freud and Kafka discover their new human or body images? And how did their human- or body images influence them in the modern age? Their human images are basically similar. The keyword is "otherness". Otherness in one's own body, for example; the unconscious, illness and the libido, things which can not be controlled by the subject's consciousness. Freud wrote about the 'uncontrollableness' in the body, namely the libido, unconscious and "es" in his papers, and Kafka described the 'uncontrollableness' of the body as such in his story "The Metamorphosis". From the anthropological, literary and pathological aspects, this research has interpreted the existence (Dasein) "otherness" in the human body which Freud and Kafka believed in.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：カフカ フロイト アントロポロジー 身体観 ドイツ文学

1. 研究開始当初の背景

フロイトとカフカには時代的、地理的、言語的な共通点があり、またそれぞれの身体観の根底には、「身体の内部に主体/意識によってはコントロールの不可能なもの、すなわち他者性」が潜んでいると洞察した点で共通しているといえる。両者の時代は、ダーウィン、ニーチェなどの思想的影響によって、近代以前の間観が大きく転換した時代だった。また、フロイトやカフカ以降にも、彼らの洞察が影響を与えた結果、人間観および身体観は変化したのではないだろうか。そこで、両者の人間観、身体観の共通性と違いを探り、彼らの洞察が現代的な人間像の形成にどのような影響を与えたのかを探ろうとする意図が本研究の背景にあった。

両者の思考の共通性は、上述した「身体に内在する他者性」という視点から捉えた場合、比較的はっきりしているといえるにもかかわらず、この共通性に関してこれまで詳しく論じた研究は、国内では探した限りでは見つからなかった。デリダやアガンベンに代表される人間学的な研究が進められる昨今、改めて、ヨーロッパ文学・思想史における重要人物であるフロイトとカフカに焦点を当てて、彼らの洞察する近代以降の「人間」とはどのようなものなのか、そして、われわれの「身体」はどのように言説化されて、どのように移り変わっていくのかを研究するのが目的だった。その際に本研究が分析のキーワードとしたのが、フロイトとカフカ自身の「病い(ex. フロイトの場合：喉頭ガン、神経衰弱、中毒、人工器官、カフカ：結核、ノイローゼ、離人症状、心身症など)」だった。

「病い」は主体にとって根本的にコントロールすることが不可能であるという点において、絶対的な内在する他者といえる。カフカとフロイトが、人間の内部に潜む他者性を発見するに至ったのは、彼ら自身の「病い」に対する洞察が手段となったのではないか？そのような仮定に基づいて、本研究では病跡学的な視点からも両者の人間観と身体観を捉えなおそうと試みた。

本研究を設定した当時は、現代資本主義社会の権力的マトリクスを論じたアガンベンの人間学的研究が注目を受ける中、彼らの書簡、日記、論文、作品などのあらゆるテキストを網羅的に扱い、彼の描く人間観、身体像の共通性と相違を明らかにしようとする試みはなく、また現在でも発表されていない。病跡学的研究は海外の心理学系の論文(Eycken/Deth 1994)に比較的に見つかるが、日本国内ではまだ充分に行われていないといえる。Neumann/Vinken(2007)はカフカの人間学的研究を行っているが、短篇小説の作品解釈に留まっており、この分野の研究は広がり可能性を秘めていた。この度の科研費対象となった本研究期間に、以上の研究内容をまとめて一冊の図書として出版したいと

いう意図を当初は持っていたが、2年間という期間では足りなかった。本研究のテーマは十分に語りつくされたとはいえないと認識しているため、今後も引き続き同研究テーマを深めていき、将来的にまとまった形式で公表することを今後の予定としている。

2. 研究の目的

この研究は、近代以降の新しい「人間像」構築に、フロイトとカフカが影響を及ぼしているとして、自分自身の身体に内在する「他者性」をキーワードに精神医学的、文学的、病跡学的な見地から総合して探ろうとする人間学的考察である。世界には身体が先立ち、その認識には心が投影されるというフロイトの説は、カフカの世界認識と重なる。彼らは自分自身の身体を、自我にとって「最も疎遠なもの」、時に「不気味なもの」として主体に回帰しうる他者性を持つ客体として捉えている点で、両者の洞察は共通している。その洞察に至るツールとなったのは、自らの「病んだ」身体だったのではないか？人間の精神と身体を無定形の複合体と捉えるに至った彼らの思索の源を探り、フロイトはそれをどのように証明するか、またカフカはいかに文学として描出したか。離人症、人工器官、安楽死などのトピックを巡り、人間が「人工神」となることの不可能性を解く研究である。

3. 研究の方法

フロイトとカフカは、心に定形はなく、神経症などの諸症状を通じ、抑圧された身体は時に「見知らぬもの」という他者性を帯びて主体に回帰してくることを明らかにした点で、それ以前とは別な人間観、身体像を成立させた。その成立に、以下の点がどのように関係しているか調べた。

- (1) 自らの身体に内在する他者性(=本研究では疾病やままたまならない身体そのもの、人工器官等)への内省はどのように行われたのか。
- (2) 「病んだ」身体は他者性もしくは人間を理解することのツールとなりうるのか。
- (3) 彼らの洞察が、現代的な問題(離人感とリストカットやニート、人工器官、安楽死等)の分析にどのように応用可能であるか。

4. 研究成果

(1) 2013年度の研究成果

2013年8月にウィーンのプロイト博物館へ赴き、現地の研究員たちとフロイト研究に関して議論を行い、本研究に関してアドバイスを受けた。その成果については同年9月に北海道大学で行なわれた日本独文学会のシンポジウム「フロイトの彼岸 精神分析、文学、思想」にて、「世界の破れ目と回帰する身

体 フロイトとカフカにまつわるアントロポロジー」と題し、口頭発表を行った。本発表では、フロイトとカフカの身体と心にまつわる思索を探りつつ、彼らの身体観が形成されるに至った源を遡上する試みを行なった。その際、本発表がキーワードとしたのは、フロイトが装着していた人工器官、カフカの離人感といったトピックス、そして両者のテキスト『文化の中の居心地の悪さ』(フロイト)や『ある犬の研究』(カフカ)に共通して描かれる「寄り添いのなさ」という感情についてだった。(本研究の共同研究者である土屋勝彦は、本シンポジウムの司会であり、研究の取りまとめや学会当日の議論の活性化に大いに尽力した。)本発表の成果は2014年、日本独文学会研究叢書 101 に同タイトルの下、日本独文学会から出版することができた (ISBN 978-4-901909-01-3)。

また2014年3月には、カフカの身体観に焦点を当てた査読付き論文「カフカの『あるアカデミーへの報告』からよむ人間像 ロートペーターのミミクリの破綻と権力の複製性」を『愛知工業大学紀要報告』に発表した。

(2)2014年度の研究成果

2014年5月には、麗澤大学で行なわれた日本独文学会にて、「カフカにおける文字、スケッチ、身体」というタイトルで発表を行った。(シンポジウムタイトル: Bildlichkeit und Schriftlichkeit in der deutschen Kultur zwischen Barock und Gegenwart. Mit aktuellen Ansätzen aus der Kulturwissenschaft und der Literatur.)本発表は、カフカの初期のテキスト『ある戦いの記録』における身体観の離人症的な歪みについて、作家自身が同時期に描いたスケッチに、視覚的に描出される身体の線の歪みと重ねることで分析を行い、作家独自の身体観および人間観を明らかにすることを目的としていた。ここではフロイトに関して言及することまではできなかった。

本研究の成果は2015年、日本独文学会研究叢書 108 に、“Franz Kafkas Zeichnungen und seine Erzählung „Beschreibung eines Kampfes“ ”というタイトルの下、日本独文学会から出版した。(ISBN 978-4-901909-08-2)。

また2014年7月には、上記の研究テーマを、フロイトの身体観とあわせて深化させた内容について、愛媛大学で招待講演を行なった。(発表タイトル:「歪んだ身体へと至るカフカのスケッチとテキストとのシークエンス」)ここではカフカの離人感、またフロイトによる離人感にまつわる言及を分析し、それがカフカのスケッチに視覚的に描かれる身体においてはどのように描出されているのか、図像とテキストとの相関性について探った。

2015年2月には台北へ出張し、台北大学の

研究者 Christian Hein 氏と、現代文学における人間像について、インタビューを行うことができた。その成果は同年度に日本ドイツ語学文学振興会から助成金を受けて水声社から出版した単著『カフカの動物物語 檻に囚われた生』に、(出版までの時間的な制約のため、わずかだが)活用することができた。同氏の研究内容は、科研費助成対象となった本研究内容にとって、文学に描出される現代的な人間像の問題を探る上で示唆的であり、今後の研究に、共同研究などの形で生かすことができると見込まれる。

上述したが、2015年3月に出版した単著『カフカの動物物語』は、フロイトとカフカの人間像および身体観について論述した節があり、本科研費での研究の成果によるところが少なくない。本研究の結論をまとめると、自分の身体に他者性が内在していることを認識し、その事実をテキスト化することを通じて受け止める、という行動が、やがては自らの外部に存在する他者への共感や生物および他者性の理解へと繋がりをうるのであり、フロイトとカフカはその重要性と可能性(もしくは不可能性)を描いているのだといえる。この結論は、本書の結論部に応用することができた。

(3)今後の課題

フロイトとカフカが人間や身体に対して以上のような洞察を獲得できた背景には、人間と他者(まずは自分以外の他人、そして動物/機械/女性/神など)との関係が根本的に大きく変容した時代における、他の思想家や作家による言説が多大に関係しているといえる。そのような当時の(フロイトとカフカを除いた)ヨーロッパの思想背景全般に関して、今回の科研費対象となった研究期間内に論文・口頭発表等の形で詳しく公開するには至らなかった。カフカとフロイトを語る上で当時の人間観・身体観にまつわる言説を再度確認することは重要であり、また現代の「人間」を知るためにも論じなければならないテーマであるといえ、この点については今後も研究を継続する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

山尾涼、カフカの『あるアカデミーへの報告』からよむ人間像 ロートペーターのミミクリの破綻と権力の複製性、愛知工業大学研究報告、査読あり、第49号、2014年、25-32頁。

<http://repository.aitech.ac.jp/dspace/bitstream/11133/2745/1/%e7%b4%80%e8%a6%8149%e5%8f%b7%28p25-p31%29.pdf>

〔学会発表〕(計 3 件)

山尾涼、世界の破れ目と回帰する 身体フロイトとカフカにまつわるアントロポロジー、日本独文学会、2013年9月29日、北海道大学(北海道)。

山尾涼、カフカにおける文字、スケッチ、身体、日本独文学会、2014年5月24日、麗澤大学(千葉県)。

山尾涼、歪んだ 身体へと至るカフカのスケッチとテキストとのシークエンス、愛媛日独協会、2014年7月19日、愛媛大学(愛媛県)。

〔図書〕(計 3 件)

山尾涼、日本独文学会研究叢書 101、世界の破れ目と回帰する 身体 フロイトとカフカにまつわるアントロポロジー、In: 『フロイトの彼岸 精神分析、文学、思想』、2014年、19-32頁。

山尾涼、日本独文学会研究叢書 108、Franz Kafkas Zeichnungen und seine Erzählung „Beschreibung eines Kampfes“、In: Bildlichkeit und Schriftlichkeit in der deutschen Kultur zwischen Barock und Gegenwart. Mit aktuellen Ansätzen aus der Kulturwissenschaft und der Literatur..、2015年、32-45頁。

山尾涼、水声社、カフカの動物物語 檻に囚われた生、2015年、総頁数 251 頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山尾 涼 (YAMA0, Ryo)
松山大学・法学部・准教授
研究者番号：70639608

(2) 研究分担者

土屋勝彦 (TSUCHIYA, Masahiko)
名古屋学院大学・国際文化学部・教授
研究者番号：90135278

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

Christian Hein, 台湾大学